

中尾：「石門心学」活動の現在

「石門心学」活動の現在

— 生涯学習としての『心学明誠舎』活動小史 —

中尾敦子

Action for “SEKIMONN SINNGAKU” of the present day

looking the history of “SINGAKU-MEISEISYA”
on the view point of Lifelong Education

Atsuko NAKAO

はじめに

「石門心学」と生涯学習の研究の途にある筆者とのかかわりを時間軸に沿って検証し、伝統ある社会活動をしてきた「心学講舎」の現代的課題について言及することを本稿の目的とする。本稿においては「石門心学」そのものについての先行研究に言及しない。

はなはだ個人的な事象から本稿を始める。筆者自身、物心つく時代を、石門心学の研究者でかつ心学講舎主宰者が父である家庭環境で過ごした。日常生活で「心学・石田梅岩」に出会う、心学の普及活動が行われた社団法人『心学明誠舎』の事務所が自宅でもあった。その時代、筆者にとっての心学は、古色蒼然とした匂い、復古主義的にも見える言語や雰囲気などすべてのイメージが筆者を「石門心学」から遠ざけるリアクションにもなっていた。このような若年期の不幸な出会いと、自然科学を学んできた経緯などが「心学」から、長期間にわたり筆者を逃避させていた。しかしながら、生来の出会いが、皮肉にも筆者の今日の心学活動の基盤にもなっている。

本稿を記すことになった経緯、すなわち『心学明誠舎』とのかかわりからはじめる。甚だ個人的なアクシデントが、筆者を「心学」に縛り付けることになった。最初は、ただ短期間のつなぎ（橋渡し役）としての立場で始まった。それは、江戸時代から存続する心学講舎『心学明誠舎』の事務局で、しかも舎主的立場を兼ねる立場であった。

爾来、今日まで20年という歳月を重ねるに至っている。本稿は歳月の経過に沿って「石門心学」の活動史を筆者とのかかわりを通して記す。社団法人という公益法人であることから、『心学明誠舎』に社会的責任、公共性が要求されることも鑑みて20年間の小史をまとめる。そこで、本稿は「明誠舎沿革略」「例会記録」^(註⑦)に記される心学明誠舎の沿革史以降（1986年）を時系列に沿って、事務局担当者である筆者自身、「生涯学習」の研究の徒として「おとなが学ぶ」視点から活動史を記録したい。

昭和61年以降の「石門心学」の講座活動の記録を付表とし、筆者の活動を通し心学講舎が遭

遇した社会事象を概観する。これら次代に残す作業を通し、心学講舎の今後の課題を提起したい。とりもなおさず、筆者の研究関心事である生涯学習における市民活動を考察することにも繋がると考える。

換言すれば、民間団体として存続する『心学明誠舎』の歴史を生涯学習の視点から概観し、生涯学習社会における学習提供者、支援者の立場から、歴史的伝統をもつ心学講舎の現代的使命と今日的課題を重ね考察したい。

「石門心学」「心学講舎」などの先行研究は多様な分野で、多くの雑誌、論文、書物などに発表されているのでそれに委ねたい^(注①)。さらに、本稿のテーマである心学講舎『心学明誠舎』の創設や経緯については、「心学明誠舎沿革史^(注②)」「大阪春秋特集号^(注③)」などに纏められている。筆者が読破し、参考文献として巻末記載しておくことは必要不可欠なことであろうが、あえて本稿では『心学明誠舎』の現代史(20年史)、特に生涯学習の現場で筆者がかかわった経緯からはじめ、生涯学習の学習提供者の視点から、また生涯学習の実践者として考察していくことを第一義にしたい。

具体的には、『心学明誠舎』が時代変遷の中で、社会教育政策や方針とどのように関係し、活動をしたかを事務局として組織運営、講座企画にかかわった立場から見ていく。さらに、社会教育が生涯学習と姿を変えていく時代に、所管官庁である文部科学省、大阪府文化部、大阪府教育委員会などとの連携や支援、今後の変化も透視することを試みたい。

本稿は、I章に記す柴田・竹中二人の心学研究者が主宰する例会が300回を迎えた昭和61年(1986年)から始める。しかしながら、20年の活動と『心学明誠舎』の終幕を企てることから始まった作業でもある。

21世紀をむかえ、筆者は諸般の事情から、『心学明誠舎』の法人格の返上(閉鎖)を考え進めていた。その方針を変え、新時代にむけて心学講舎の活動を継続することを模索するきっかけともなった先人の言葉が記載された資料をここに紹介して本論につなぎたい。これらは、筆者に『心学明誠舎』活動の実践を記録することの重要性、必要性を教示した原因のひとつもあり、生涯学習を実践しながら研究していくきっかけになった資料である。

「……石田梅岩の学問——それを後の人は心学と呼んだが——は、深い哲理を求めつつその時代の切実な問題を自由に取り扱っている。われわれはその態度に学ばねばならない。心学が現代当面の実生活に役立ってこそ、当舎の使命が達せられる。時の遠く隔たった文献を何かなしに眺めるだけでは、空まわりするだけであろう。先人の言葉に、深い意味がこめられていることはいうまでもないが、それを現代に即した、新しい感覚を持って理解すべく、特に先人の心根を身につけることが何よりも必要であろう。そこでわれわれが身近に感じ取ったものを端的に打ち出し、心の問題をざっくばらんに話し合い、それを心学の精神で考え、道についての気づいたことを述べ合い、聞きあうことが何よりも大切であるまいか。そうしてこそお互いがいささかなりとも磨かれ、育てられていくのであろう。現代の心学の重要な一面はかくあるべきではなかろうか……」(沿革史 p. 22、機関紙「みち」戦後初代理事長田中良雄巻頭言より)

中尾：「石門心学」活動の現在

I 心学講舎『心学明誠舎』の沿革略

心学講舎『心学明誠舎』の創設から昭和の休会までの歴史を、昭和50年に発刊された「心学明誠舎沿革略」から簡単に抜粋しておく。

I-1 江戸時代から明治・大正・戦前まで

江戸時代の町人学者「石田梅岩」についてはこれまでも多くの文献に記されている。石田梅岩は江戸前期（1685年）に京都府亀岡市で生まれ、およそ30年以上京都で商人として働いた。その後、人間の本性についての考察を重ね、士農工商などの階層的な区分を超え、人間性そのものの教えを唱えたとされる。この彼が思考し、語り広めた思想などをその弟子たちが体系化したものが「心学」といわれる。没後、その教えを広めるために手島堵庵、中沢道二などの弟子たちが心学教化のために全国各地に多くの講舎を設けた。この講舎活動では、3つの方法がとられることが多かった。ひとつは道話、ひとつは禅的な静座、あとひとつは会輔（ゼミ学習的なもの）という形式であった。

この時代、全国に多くの講舎が設けられ、大阪には4舎が作られた。その一つが「明誠舎」で、昭和50年に『心学明誠舎』が発行した沿革略によると、天明5年（1785）9月に大阪の南船場に創設され、船場における心学活動の中心となる心学講舎すなわち心学ゼミナールの道場のようなものであった。

明治期になると、いくつかの講舎はなくなったが、明誠舎は大阪市内で存続した。明治初年、学校制度が整備される時には明誠舎の舎屋が新しい校舎として提供されたこともあった。教育が国家制度として変化してくるにつれ、明誠舎の活動は一時期、神道の様子を呈した時期もあった。しかし、明治38年（1905）、再び心学本来の面目にもどり、心学講舎としての活動をめざし変革した。その時代、明誠舎の繁栄と永続を願い、現在とほぼ同じ内容の定款が定められ、法人組織が整えられた。同時に内務大臣から社団法人格を許可され、新しい時代に沿って活動する足がかりの基礎が作られた。これが現在まで継続している文部科学省所管の法人組織の基盤である。

I-2 戦後（1945年）の再発足

戦後（1945年）、占領軍による民主教育の振興が進む中で、生活に即した道義の公用を目標とした市民の思想のひとつとして心学が再び注目された。昭和29年（1954年）には、大阪の住友系列9社が資金面で援助し、明誠舎が再興された。これを機会に、それまでの個人の財力や思い入れなどを基盤にしていた一部船場商人などの篤志家による組織運営から離脱し、社団法人として社会的認知と責任を担う私塾運営がはじまったのである。

当時の活動は、昭和30年（1954年）からは主に「心学」の講話を聴く会として、毎月一度開催された。この時代に、会場として大阪市内で公立高校の教室が提供されていた事もあった。今日、文部科学省や地域自治体が新規の事業として、先進的に取り組もうとする「学校施設の地域への開放」を先取りする様相を呈していたことは大変興味深い事象とも考えられる。

講話の演題は、哲学から歴史、政治、経済、社会事象、スポーツ、時には流行歌など時代に

沿った多様なテーマが展開され、生涯学習としての広がりが見られた。回数も初期は毎月1回、その後2月、8月を休む形式で原則年間10回の企画がされた。戦争後の活動再開以来、昭和59年(1984年)の筆者が引き継ぐまでに、298回と回数を重ねた。内容は、「心学」の研究者であった京都大学教授柴田実、近畿大学教授竹中靖一が心学講話をリレトークした。しかし、それだけでなく回数を重ねる間には舎員(会員をさす)や、法人理事など異業種で活躍する財界人・経済人なども講師を勤めた。この当時、NHKなどの放送でも何回か講和や心学がとりあげられ、参加者も聴講するだけでなく、話題に熱心に入り込んでいた。企画の進め方などにも、今日の生涯学習の現場で用いられる参加型講座の形式が見られた。さらに昭和32年は機関紙が発行され、情報の共有、情報の広範な伝播を目指した。

しかしながら、社団法人としての規模は弱小であり、社会的な広がりも拡大しないままであった。再興時、理事長を務めた田中良雄が指摘した「細くとも長く……」の状況であった。社団法人としての法人組織、目的的に運営され、社会的使命を確立したか、はなはだ怪しい状況でもあった。

活動が回数を重ねる中で、地場企業(大阪・船場の商人)の経営者などが、企業倫理のひとつとしてこの心学の道義を活用するべく熱心に参加する姿も定着しつつあった。石田梅岩が心学塾を始めたのが、経済的・文化的高揚の元禄期を経て、幕藩制の矛盾が表面化した享保年間のことでもあり、今日のバブル崩壊後と類似している時代でもあったからと憶測もできる。人々は、新しい商道徳や経営理念を模索しようと石田梅岩の思想に活路を探そうとしていたとも考えられる。この様な考察は、心学や石田梅岩の思想や経済との関係についての先行研究に詳しいのでそれに委ねる。

I-3 昭和の休会(1984~86年)

心学講舎『心学明誠舎』主宰者であり、経済史からの心学研究者でもあった竹中の病臥から、死去に伴い活動が中断した。

II 『心学明誠舎』活動再開(運営・企画・会場など模索時代)

II-1 組織再編成・舎員、支援企業の確保にむけて(1986年~1988年)

法人組織の状況は昭和51年の法務局法人登録以後、理事長、理事の多数が死亡などで不在のまま組織は存続した。法人事務所は、それまでの大阪市阿倍野区から吹田市新芦屋(中尾宅)に移転登録。(過渡的処置として)活動は、おおむね2年間休業していた。

① 休会までの事実確認と再開準備

戦後明誠舎活動の再開以来の主宰者であり、理事長でもあった竹中靖一の突然の病臥により昭和59年(1985年)より実質上休会された(大阪春秋72号参照)。熱心な数名の会員から、再開に向けての強い要請があり、主宰する人材を探し始める。それまでも当舎の会合にいささかの関係があった加地伸行(大阪大学文学部教授)が学術面の支援・協力を申し出る。従来からの有志舎員や、竹中靖一の家族・親族の協力で再開の準備がおこなわれた。これを受け、当時

中尾：「石門心学」活動の現在

竹中靖一の介護者でもあった中尾正（筆者の夫）が、関係関連官庁（文部省や大阪近畿法務局）などでの調査・ヒアリングを重ね、行政指導を受け、法人格の継続手続きをおこなった。筆者中尾敦子（竹中靖一の息女）と、主たる法人会員である住友系列企業への再支援協力要請など、財政面・組織面での再編に向け取り組み、休会前の体制の復活に臨んだ。

当時の記録と、中尾正の話によると、企業への依頼と協力の経緯は次のとおりであった。主宰者竹中靖一との従来からの経緯を知る企業責任者が在職中であったこと、大阪財界において講演会に頻繁に出かけ知名度も高かったこと、在阪大手企業の社史作成などにも深くかかわっていたこと、企業内研修、経営者研修にかかわりを持ち、一方で大阪の文化継承を目指す会など手広い活動にかかわっていたことなどがあり、企業経営者は社団法人への支援に好意的であった。また、中尾の話によると法人会員であった住友グループ企業が社会的使命から、戦後の荒廃の中で『心学明誠舎』再開の中核を担ない、活動を活性化する動きをしてきたことなどを強く訴えたことで、協力を再開し、以後の継続的な支援の見通しに繋がったと語っていた。

この時代、企業の社会責任や、社会貢献など直接的に収益を伴わない経済活動はまだ未成熟の時代であった。しかしながら企業側も、直接的な経営利益のみを追い求めるのではなく、企業の社会的責任を拓げる経済的ゆとりもあった時代とも考えられるのではないだろうか。バブル経済の終焉期ではあったが、企業経営者にとっても、個人の裁慮や配慮でいくらかの出資を決定できる財政的なゆとりも残っていたと考えられる。

このようにして、財政面の再開準備が整い、それまで法人との関係が皆無であった中尾正が中心になり主務所管官庁（文部省）や法人所管官庁（法務局・税務局）などへの手続き、事務処理が行われた。この時の事務処理の経緯について中尾は以下のように述べている。手続き上は、主宰者が竹中靖一のみであったこと、社団法人という公益性があり、社会的責務を持つ法人を引き受けたこと、それに伴う家族的責務感からの行動であり、「心学講舎」活動には興味や関心がなかったと述べていた。このように、現実社会で心学の専門的研究者でない人々にとって、活動の趣旨や目的などはほとんど周知されず、興味も得られないままである。これは、再開後から現在に至るまで法人組織運営を積極的に引き受け、かかわりを持つものがない原因であると考えられる。

② 『心学の会』としてリニューアル・スタート

1986年（昭和61年）8月23日社団法人の定款に沿い総会が召集され、法的にも、実質的にも社団法人『心学明誠舎』として活動が再開された。

法人定款は、明治36年に規定、戦後変更。その後、2003年になり改正の申請中である。主務官庁である文部省の指導などで、主たる事務所の移転・理事などについては登録変更せず従来そのままを進めることになる。当時の『心学明誠舎』は、文部省所管法人、大阪府地方法務局登録、三島府税事務所税務登録と確認される。法手続き上は、平成15年（2003年）まで継続し、平成15年になり、改めて法人登録・理事改正などが更新され、受理されている。

再開総会日以来、協力した学識経験者か中心になり、明誠舎としての例会（講話）が再開される。例会の内容などは少しずつ変化した。毎月開催された例会としての、学習会は2ヶ月に

1回、年間6回になる。内容もそれまでは、講話が中心であったのに比べ、「心学」になんらかの関係がある分野から、専門性のある研究成果が平易に語られるものが多くなった。そこで、名称も「心学の会」と名称変更し開催されることになる。

会員については一定の年会費を徴収し、随時の参加者からは参加費として資料代を集めることになった。明治期は勿論、戦後再開されて以来、『心学明誠舎』の聴講システムは江戸時代からの心学講舎の流れを受けついでいた。すなわち、舎員として登録された個人が見合った舎費を供出し、一般の参加者は無料で、希望するものはだれもが聴講が出来るシステムであった。講座提供をするもの（講師）は概ねボランティアで、事務を取り扱う労力、送料、講師交通費などすべてがボランティアで支えられたのである。しかし再開時から、聴講料についてはカルチャーセンターの市場価格に比しては安価だが、受益者負担として参加資料代を徴収することになった。個人会員（舎員）は年間一律の会費を支払う、企業などの団体法人会員は法人舎費を納め、運営の会計を維持することですすめられた。幸いにも再開した時代は、まだまだ経済界は文化活動や社会活動への資金提供をするゆとりを残していたように見受けられ、運営資金は潤沢で健全に賄うことは可能であった。

実質的な運営面では、会場として民間の学習施設を探し、場所を転々と変えていた。先行予約が出来ないことなどで開催の時間や曜日が固定しないことも多く、活動が矮小化しがちであった。会場確保、開催通知の発送、大手新聞社などマスコミへの情報提供などいくつかの複雑な問題があった。これらの業務を専任して処理する事務局の体制は皆無であり、事務局を預かる中尾敦子他数名の個人ボランティアで賄われた。個人の力のみで事務局、運営が処理されていた休会前の体制はそのままであり、主宰者の突然のアクシデントから活動を休止せざるを得なかった経験は、生かされないでそのままの状況で進められていた。社団法人という法人格でありながらも、まだまだ昔の家内生産システムの運営がなされていたのである。これらのことは、再開第1期を2年という短期間で終えることにもつながることになった。再開準備に奔走した中尾が企て、望んだ恒常的システムを成熟させることはもちろん、公的な法人組織でそこに、運営などを委ねることもないままに例会が重ねられ、継続した。

運営面の粗末さに反し、講座内容は当代「心学」研究の中核となる研究者が高度な内容で、数々の講座を提供し、参加者は「心学」について広い見識をつかむことができ、充実した企画が展開された。

II-2 組織再編成・活動拠点模索の時代（1988年～1991年）

1988年、理事長加地伸行が退任。理事長に別所俊顕（道修町少名彦神社宮司）が就任する。後任理事長を引き継いだ別所は幸いなことに、大阪道修町で大手薬種会社の信望も厚く、地域とのネットワークを活かして地域や地場企業との密接な結びつきの強い、〈薬の神さん『しんのうさん』（少名彦神社）〉の宮司である。『しんのうさん』は、宗教法人であるが、大阪の地域文化・伝統・学問を支える「道修町文庫」を主宰し、広く文化活動に取り組む薬業の守り神として道修町の文化の拠点でもある。

学術担当理事として山中浩之、小堀一正が就任し、講座企画の中核を担う。

① 活動方法・組織運営の模索

再発足後2年たち、臨時総会（1988年10月28日）が開催された。再開後初代の理事長加地伸行大阪大学教授の提案で社団法人及び「心学の会」運営について討議を重ねる。加えて、理事長辞職の意向が提示された。

この時の加地の意見書によると、問題提起と辞職は単に理事長の個人的な問題だけではなく、時代の変遷の中で伝統を背負う民間私塾活動の継続・維持・発展の可能性と方策を再考していく問題提起であった。しかし法人活動再開後、間もない時期であり、オピニオンリーダーの不在、組織運営の牽引力やエネルギーを重厚に注ぐ理事や舎員は皆無であった。実務上の再開の中核を果たした筆者は、その社会的な責務からとりあえず従来までの様式を継続していくことになった。幸い、大阪の伝統的地域文化とその歴史的価値の重要性を憂え、支援を申し出る筆者の友人、別所俊顕が理事長に就任し、形式上の当座の危機は救われた。

組織運営の昏迷に反して、山中・小堀が中核になり進める講座では、皮肉にも学術的・文化的にも意義ある、興味深い例会を重ねることができた。このような模索を重ねる混乱期にも、筆者は『現代において、心学明誠舎がなぜ要求され、一部の人々ではあるが存続を必要とするのか。納得できる理由や価値も見つけ出せない』状況のままであった。伝統の引き継ぎ者として、必要という人がいるなら手助けをしていこうという幾分ボランティアな気持ちから、事務局にかかわるといふ消極的意思しかないままであった。換言すれば、生来からの日常生活の一部であり、家庭生活の一部に過ぎなかったということが妥当であろう。それだけでなく、機会あれば、次代の受け手を探し出すことに終始していたのが、この時代の筆者の偽らぬ心境であり、状況でもあった。

② 再開後の心学講舎『心学明誠舎』活動の問題点

活動は、明治から昭和、平成へと際立った方向転換もせず、『小さくとも長く続けられること』と記された初代理事長田中良雄の言のまま継続していた。心学講舎として明治期に作成された文語体の定款を遵守し、活動を継続することや、講舎設立の江戸時代からの伝統的な講座提供の手法、財政的な面から従来への運営形態を維持していくことは果たして可能であるのか？ また今日に必要とされるのか？ 社団法人という特定公益非営利法人として、活動が公益的必要性は何処にあるのか。など当時、筆者が日々感じていた問題点であり、模索を続け、組織の存続と将来を問い直す重要な課題でもあった。再開後の主役加地伸行からだされた問題提起は、幾分筆者とは立場を変えてはいるが、同じようであった。書面により提起された骨子は次のようであり、問題点をここで整理しておきたい。

まず、前段には理事長の個人の所信が述べられている。

『自身は当会の運営について財政面と、学術面の2面に分けて考えたい。さらに自身は、学術的関心を心学に抱いておるのであり、その普及には関心がない。このような点からも、先代の主宰者である竹中靖一の遺志とは相違がある。当会は実践活動に適する方がよいのではと考える』

続き提案事項が2分野にわけ整理されている。

I、学術面から

- ① 心学の普及すなわち実践的活動が主体か、学術的・学問的活動が主体であるのか？
- ② 「心学の会」としての講座展開が、教養的講座になりがちで、他の文化講座との差異がなくなるのではないか？ 換言すると、心学をめぐる学問的関心の深い講演内容から離脱していくのではないか？
- ③ 学芸面でかかわる時、中核となる学識経験者に過重の個人的負担がかかり、本来の研究（仕事）への障害が大きくなると考えられる。

II、財政面から

- ① 企業の協力が期待薄であり、発展的な企業支援が将来的にも望めない。
- ② 会員増加についても将来的展望を見られない
- ③ メディアや社会的広がりを得るための広報活動に多大なエネルギーが要求されるが、効果が少ない。

加地は以上の理由を持って、この会を主体的に運営、継続していくには負荷が大きすぎるものが辞退する要因であると続けている。末尾には、継続会員の存在、講舎の伝統などを考慮すると、誰かがなんらかの方法で受け継いでいくことを強く希望するとも結び、他者へ委ねる意向を示していた。

明誠舎という私塾が個人的な力で運営されていることの限界を、広く社会に向け問いかけ、同時に企業が社会的責任や使命感を持ち、文化的、社会的活動に、どのような形式で、どのような規模でかかわれるのかをも問いかけたのではないだろうか。

今日の学習社会時代、多様な学習機会が多様な場所でくりひろげられている。多様なニーズが生じている現在に、伝統を受け継ぐ弱小民間私塾を、社団法人格として維持していくことの責任、役割、困難さを議論の俎上に引き出す事件であった。しかし、関係者間で十分な論議をする時間的・人的ゆとりもなく従来からの活動が継続した。

③ 再々の組織編成と暫定的運営

理事長の辞職意向は固く、社団法人の総会において新たな運営メンバーが選出された。

船場という地域特質を活かし、企業との関係を維持することが法人の資金面の死活問題であった。そこで、新理事長を中心に大阪の文化としての私塾の継承を、地域でささえる体制の必要性が審議され、理事一同も再認識し、活動体制を模索しながら進むことになった。このための事務局体制の合理化などは不可欠であったが、その規模・体制などに変化を生み出すところまでの方策が見つけられないまま、従来活動を保守し、動き出した。

懷徳堂や適塾のような大阪の町中で生まれ今も活動を重ねる伝統の塾は、高等教育機関でも大阪大学などの公的機関に事務局を構え、財団としての運営体制が充実していた。これらの例に倣い、『心学明誠舎』を公的機関に委ねることは何回となく図られた。その設立の趣旨『民間・町人の……』さらに定款や歴史からも法人の活動目的などは、あくまでも在野の民間活動として継続することでの意義の重要性が要求され、選択されることになった。

中尾：「石門心学」活動の現在

石田梅岩および、その弟子が講舎を設けた時代、各地の心学講舎は『どなたでもお代は……
いただく……』としてすべての人々のために運営されたといわれる。このような歴史的事実
を考慮しながら生涯学習を提供し続けるとき、今日の生涯学習がめざす学習の狙いや提供方法
の模索と対比して、興味深い問題が潜在し、顕在化しているように見受けられる。

心学明誠舎が明治時代、戦後と大きく時代が変革していく中で、その学習提供の初期の目的
を変えないままに、発祥地大阪で一部の篤志家の力をかりて、財政基盤・運営などを維持して
いること、活動の方向を示す定款も変更せず遵守し、細々と生き残ってきたことは学問的にも
はなはだ興味深いこといえるだろう。

④ 現代に繋がる「心学」講座

さまざまな模索、変動を重ねつつ、まったくのボランティアではあったが、心学研究に造詣
の深い山中浩之、小堀一正が中核となり講座は展開した。これまで心学明誠舎にかかわった講
師（学識者）からはゆるやかな世代交代が見られた。講座内容はこれまで同様に「心学」を中
核にしたが、それだけにとどまらず関連あるテーマが盛り込まれ、年間10回の講座が開催され
た。講座内容については企画の中核を担った両者をはじめ、若手研究者グループの積極的なつ
ながりが生かされ従来の講座に負けない、充実したものが提供された。

受講者にとって、実学としての「心学」であり、また専門性も高い「心学」講座でもあり、
多角的な視点での講座が組まれていたことがプログラムからも明瞭である。

講座事務局の筆者は、序章に引用した初代理事長の思い（……時代の問題を自由に扱い……
新しい感覚を持って……）を生かすべく、講座が若手研究者にとって、学問領域の枠組みを超
えて、発表する機会として活用されるだけでも、社会的な意味を持てると幾分ボランティアな
気分でのかわりを持ち始めた時期でもあった。

運営の事務的や財政的問題点は一向に発展的な解決もしないで、事務局体制は強化も変化も
しない家内システムのまま動いていた。事務処理の実務化などを充実することなく、再開第2
期は惰性の中で進展していった。紆余曲折の再開から3年、会場は数箇所を渡り歩きながら、
皮肉なことに安定した人数の聴講者・参加者を迎え、『心学明誠舎』の活動が社会的に認知さ
れ始めてきた時代であった。

Ⅲ 大阪府立文化情報センターとの出会い（1992～1995年）

1992年、会場が「大阪府立文化情報センター」に移る。定期的な開催と場所の確保が可能に
なる。

講座企画に携わった山中、小堀の人脈と、社会教育担当の文情センター職員の熱意ある働き
かけが一致した。以後、大阪府立文化情報センターの共催事業として開催されるようになる。

Ⅲ-1 中ノ島時代（大阪府教育委員会所管『大阪府立文化情報センター』への乗り入れ）

ここで、「大阪府立文化情報センター」について簡単に紹介しておきたい^(参考2)。

1981年、大阪の経済・文化の中心地、住友中ノ島ビル5階に生まれ、設置目的は「府民の文

化活動及び生涯学習活動を推進するため(第1条)」とうたわれている。文化・生涯学習情報を扱う公的施設として、知事部局と教育委員会社会教育課の共同事業とされた。開設以来、関西大学や、大阪の町の学問所を顕彰する財団法人・大阪大学「懐徳堂記念会」などとの共催事業で実績を挙げている。

共催事業開催の取り決めは、センター側(大阪府)はホール使用料を免除し、マスコミ・公共施設への広報資料を配布する。大学などの共催提供機関(心学明誠舎)はテーマと講師の選定、講師謝礼の支払い、受講者受付事務の担当を行うことを原則とする約束で実施された。1982年から関西大学との共催を皮切りにこの方式で、センターは12の大学、機関との共催を開いた¹⁾。

① 「明誠舎セミナー」「早春セミナー」へ名称変更

社会教育・生涯学習の提供機関としての大阪府側の思惑は多様なニーズの掘り起こしを、明誠舎側からは同一場所での会場確保、多方面への広報提供など、共同で開催する効果を確認した。そこで、センターの「共催講座」に参加することになった。この時から心学明誠舎の活動に、行政との協働活動が加わった。1992年3月、初めての共催講座と1ヶ月の展示事業の企画が「早春セミナーと展示」として実現した^(注参照)。

この時の広報を再現してみると、『大阪学問所としての文情センターに、近世大坂の心学塾明誠舎の講座を開設します。(石田梅岩の心学は、石門心学と呼ばれ町人の精神的支柱となりました)』と呼び込みの文章が書かれ、タイトルは『近世町人塾 心学明誠舎を再現する』として文化情報センターと(株)心学明誠舎の主催で開催された。(講座内容は記録を参照)かなりオーバーなチラシであったが、これまでにない参加者を呼び込むことができた。

これを機会に、明誠舎の例会は「明誠舎セミナー」と再び改称され、年度計画も検討された。1992年度から、例会を2種に分け5、7、9、11月に4回、加えて「早春セミナー」と称し年度末2、3月に3日連続特別講座を大阪府立文化情報センターとの共催で開催することになった。前者は社団法人としての独自事業である。会場費などは減免されないが、先行予約の特権が行使可能であった。金銭的なメリットは小さかったが、運営上の最大難関であった恒常的な会場の確保が保障されたことは大きかった。各回のテーマは主に「心学」にカンケイシタ企画であり、連続講座は石田梅岩の心学が誕生し、その後全盛であった時代である『江戸期』をテーマに多様な分野の話題を取り上げた。

企画するうえで、年間を通してのメインテーマは2本の柱を設け開催した。そこで、多様なテーマを盛り込んだ企画でありながらも拡散しないで、あくまでも地元大阪の文化を中心に絞り込むような試みになった。企画に参画した理事の緻密な試みで斬新な講座提供ができたこと、定期的に一定の公的施設で開催されることで、会員や参加者が少しずつ増加し始めたのもこのころであった。運営基盤・事務の集約など法人組織は、未成熟で個人ボランティアに依存する運営のままであった。

② 活動の発展的なひろがりの予兆

民間団体にとり、公的施設との共催事業という「オスミツキ」や「タイトル」は活動の恒常化や、運営基盤の安定には効果を生み、社会的な市民権を得ることに繋がる。換言すれば、社会的に認知されやすい。一方、公的施設は、生涯学習講座の充実に民間活力を導入することからいくつかのメリットを得る。会場提供、活動の広報を担う行政は、多様な分野の取り組みをいながらにして企画でき、施設の活性化を図ることができる。現実的には、既存の資財を使い、さらに広い分野の講座提供などを資金や専門的なスキルへの投資（企画力・講師など）は皆無である。新規事業の展開が容易に、可能になり、施設への更なる集客が図れるようにも見えた。民間団体にとってのメリットも大きかった。一例としては、中ノ島という交通の利便性を生かした施設を優先的に提供されることで、市民活動が定着しやすくなる。公的な広報や、多方面への情報提供などでは金銭的投資と時間を節約できる。

思惑はどうであれ、共催事業の展開に向けて、グレードの高い講話が毎年企画され、明誠舎にとっても新しい基盤が確立され、民間私塾の力が社会的に認知されることになっていった。

当時、社会はバブル経済の崩壊で、経済界のかけりが著しく、まさしく石田梅岩が心学を生み出した時代にも似通った様相を呈していた。産業界でも「心学」の精神を取りあげる経営者が増加しはじめ、メディアも何度となく「心学」を取り上げることが多くなった。

これに呼応するかのように、石田梅岩生誕地の亀岡市は、心学関係の文化財などの特別展を企画した。大阪においても、大谷女子大学資料館秋季特別展「江戸期町人の商いと学び——明誠舎と丹波屋——」が企画され、明誠舎所蔵の資料などが各地に出展された。長期間明誠舎の片隅に埋もれ、人前に登場しなかった江戸時代の遺蹟が文化財として、その価値を担いで社会的な舞台へ登場したのである。これも、明誠舎の活動再開と公的機関との共催事業の実施などによる波及効果であったと考えてもいいのではないだろうか。

Ⅲ－２ 谷町時代（1996年～2003年）

① 大阪府立文化情報センターとの蜜月期

「地の利・人の和・天の時」を得、中ノ島の大阪府立文化情報センターを基盤に、現代における心学講舎としての存在は確かなものになり始めた。江戸、明治、戦前、戦後復興期のとは幾分異なりを呈し、時代の流れを反映し、組織、活動、目的も変化してきたようでもある。「心学」を現代的な視点から消化し、反芻しながら進むようにみうけられた。ただし事務局体制など、組織の浮沈をかかえる本稿筆者中尾は現代における心学講舎の今日的使命には、まだまだ疑問を重ねていた。それは、心学への造詣が浅いだけでなく、歴史的なものを維持していくことの危うさと、その必要性への疑問でもあった。行政との共催が開始されてからは、公的機関における、特定団体が共催事業を開催していく既得権の問題の是非や、公開講座の間口を広げる目的として、既に行政に何らかの形で認知された団体が先行的に、行政との対等の関係を長期間優先的に行使し続けることを問いかける模索の渦中にいた。

幸いというか、先駆的というのかこのころのセンターには積極的に民間色の強い団体などが参加していくことで、生涯学習施設を活性化していこうとする意気込みが見られた。これらの

動きは社会教育施設であるセンター職員の専門性の高い取り組みの成果であったとも考えられる。この職員たちの意気込みに触発され、筆者は生涯学習を提供する団体の事務局として、その意味づけを反芻しながら、共催回数を以下のように重ねた。

施設と心学明誠舎の学習提供への意識が合致してきた1996年から、早春セミナー（2、3月）だけでなく年度の始め（6、7月）にも1クール、1年に2期の連続講座を開催していくことになった。講座企画を主に担当したひとりでもあった小堀一正氏が『心学明誠舎の歩み』で（参照：大阪春秋）講座企画の趣旨を次のように記している。「講座企画の内容ではもはや「心学」のみにこだわらず、それをも重要な要素としながら、身近な文化的事実からはじめて、広く人間の文化そのものを考える場にすればよいという意見がだされ……」確かに、1992年の共催講座の開催以来、各期ごとに工夫を凝らした一連のテーマを設定し、3講座は毎回統一のテーマに関係性のあるもので膨らませる工夫がされた。一方で、心学をさらに多くの人に知ってもらい、『心学明誠舎』が心学講舎としての歴史や存在意義の問いかけをし、「心学」をさらに深める機会となる独自の講座も何回か企画された^(注②)。

1997年ころになると、文化情報センターは、共催講座を見直すため事業を担当してきた各機関・大学を個別訪問するなど情報収集し、公開講座や共催事業などへの再検討を重ね始めた。その当時意図された目的については、センターの20年史にも述べられているのでそれに譲りたい^(注②)。順調に進むかに見えた共催事業ではあったが、陰りが見え始めたのがこのころからでもあった。センターは積極的なヒアリング調査などで事業の見直しを行っていたが、府の財政悪化をまともなうけたのか先駆的で積極的に取り組んでいた生涯学習情報事業も後退し始めた。

その結果はまず、共催事業の責任分担の取り決めの『会場費はセンターが負担する』という条件が突然破棄された。共催団体は講座企画におけるソフト面とノウハウを負担するだけでなく、講師費用、事務経費のみでなく会場費も支払うことが新たな取り決めとして提示された。

② 文化情報センターネットワーク事業への参画（センターの移転と機構改革 1999年～）

新しい試みのひとつとして、センターは公開講座に実績を持つ大学・研究機関が連携してネットワークをつくり、ひとつの共同事業を進めることに取り組みたいという働きかけがあった。これは情報発信基地の役目を担うセンターが、多様な大学・機関の共催講座の利点を活かし、参加者に対して幕の内的講座を展開し、参加者の広がりを目指す策と考えられる。文化情報センターでの公開講座、共催講座を提供してきた老舗としての『心学明誠舎』はこの波にどう乗っていくのか、検討が迫られることになった。

近年になり（1997年から）共催事業の会場費の負担が義務付けられ、共催事業への経費が増大した。バブル崩壊後、系列企業などの法人団体会員が順次会員参入辞退の申し出が多く、財政面で逼迫していた。以上2点から、新規事業企画には消極的賛同を示した。考察で論じるが、行政との共催におけるそれぞれの役割、生涯学習政策に向けての行政の姿勢などいくつかの疑問点が明らかにされない状況と、高等教育機関である大学と民間色の強い私塾との連携事業や講座提供に対する存在意義など相違点など問題解決されないままに、ネットワークに同列で参

中尾：「石門心学」活動の現在

加していくことへの不安があった。

これらの問題点を抱えながらも、新しい試みに取り組みたいというセンター担当職員の熱意で、1998年第1回の企画が実現した。筆者が投げた問題点などの十分な審議がされないままに見切り発車のきらいもあった。生涯学習提供機関としてネットワークしていくという第一義には賛同したが、共催費負担など検討事項も多く、市場拡大を目指し企業経営的な新規事業を模索する私立大学に並んで弱小の民間私塾が参入していくには、財政的・人的資財も脆弱なことを理由に初年度の講座提供企画への参加は見合わせた。(1998年)事業は初期の目的「他分野への学習の広がり」にかなう評価を得たようであった。参加大学は12、集客数も1,700人であった。(公開講座フェスタ'98)

1999年になり、数度のネットワーク会議が持たれた。そこでは、「公開フェスタ」事業が、センターの主軸事業の一つとなって行く動きも見られた。そこで、明誠舎の講座企画者と事務局で第2回フェスタ参加について再検討した。講座の主たる企画者である講師(山中・桂島・辻本)と、事務局のボランティア体制も確認しあい、1999年から参画することになった。(資料参照)

第2回フェスタの共通テーマ「水辺——文明のゆりかご」に沿い個別テーマ「昏迷期を生きる思想——石田梅岩と心学」(辻本雅史)をもって華々しくネットワークに登場した。明誠舎自身の本来の活動をアピールしていくものとして講座を提供し、多数の参加者から好評を得た。それ以後毎年参画し現在に至っている。フェスタにおける多くの講座の中でも当講舎の企画講座は、一段と集客力があり、人気講座となっている。初年度に、参画を躊躇した不安理由である金銭面の問題は未だ未解決で、負担は重く(共催金負担、講師派遣費、事務費など)さらに事務分量も増加した。ここからも、法人組織の金銭面や、存続意義などを問い直すきっかけが生じている。

この時期から一方で、政府における構造・行政改革の流れを受け、社団法人など特殊法人の運営の見直しと、事務登録規定が複雑かつ大規模な事務容量を要するようになった。すなわち、家内工業規模の法人であれ、大規模組織で利潤効率の高い法人であれ、一律に厳しい登録規定が課されるようになった。これは「社団法人」という社会的認知権を与えられ、何らかのメリットを有する組織であれば、当然の義務であるのだろう。しかし弱小規模で、ボランティアによる事務処理・運営・経理での組織にとり、事務処理のすべてにおいては限界でもあった。所管官庁である文部科学省から法人の運営に対しての実地検査を受けたのはこの時であり、法人活動と法人組織などについての評価付けと指導をうけた。そこで、何点かの改善措置を課されることになった。これを受けて、実質上の舎主であり事務局長でもある筆者中尾は、民間が生み出し育ててきた心学講舎(私塾による活動)の終焉を察した。法人の解散を見越して動き出すことになった。文部省のできる以前(内務省)に法人格を得た伝統の組織の終焉を惜しむ人々を説得し、法人解散に向けて関係者に働きかけた。

IV 「なにわ商人」の参画で創生の地で再建期を迎える心学明誠舎の現在

IV-1 再びクローズアップされ始めた心学思想

① 心学開講270年記念シンポジウムの開催

『心学明誠舎』の解散に向かおうと画策していた事務局（筆者）の意向を覆すように、2000年10月15日に京都国際会議場で「心学開講270年記念シンポ」が開催されることになった^(参照④、⑤)。現存する他の心学講舎や自治体、報道関係など（東京・参前舎、京都・明倫舎、亀岡市、京都市）と共催での企画になった。この時こそが、法人の解散すなわち明誠舎を発展的に解散する機会でもあるとの腹案を持ちながら、心学については全くの門外漢として心細い気持ちで参画した。

シンポジウムはアメリカから、ロバート・N・ベラーを迎え1,300人の聴衆が集まる盛大なイベントとなった。この時の報告は「心学が拓く21世紀の日本」と題した書物で報告されている。また共催を持った亀岡市が広報誌にも簡潔に掲載している^(注③、⑤)。

② 生涯学習の視点から「心学講舎」の現在を概観する

柴田・竹中などが活躍した1960年から70年代にかけて、戦後の「心学」研究は佳境を呈した。以後心学研究は閉塞状況にあり、いささかカビくさい学問領域という偏見を抱き、私的思い入れだけでこれまで、事務局をこなしてきた。このイベントと前後していくつかのメディアが心学を取り上げる機会が多くなった。筆者自身も、直接ベラーにであう機会になったこのシンポジウム・レセプションに前後して、いくつかの文献を目にする機会を得た。心学が今日的な時代要求に通じる思想であり、歴史的に心学が果たした役目、現代の思想としての心学、それに加え歴史から学ぶ学習方法の意義など、わずかながらも察知できるようになっていた。このように、すこしずつであるが、心学に対峙する筆者の視点が変わりだしたのが、皮肉にも法人解散への動きをはじめたこの時代であった。

さらに、この時期は筆者が他の領域から生涯学習について学際的な学びを始めたことにも重複していた。さまざまな領域で、これまでにない出会いや思考を重ね、生涯学習についての歴史的経緯や、世界的潮流など、先人の研究・活動・考察に触れ、影響を受け始めた。法人解散に向ける筆者の動きが変化を加味してきた。法人にかかわる自らの意識を「若手・少壮研究者の発表と啓発の場」であればそれだけでもいいと考えるボランティアとしての消極的なものから、「大阪の経済界力による、大阪人のための自主的な学習とネットワークの場でありたい」、そこに向けて方向転換してみる。そこに、明誠舎の今日的な使命を見つけ出せるのではないかとこの考えに至っていった。

IV-2 大阪経済・文化人たちの参画による「21世紀型生涯学習塾：心学講舎」

これまで、支援の中核にいた住友系列企業が、2001年度を境に資金支援を撤退していた。そんなことから財政逼迫に陥り、識者に相談しながらもたどり着いた究極の選択は、明誠舎の設立時の意向を今日の時代にあわせる選択であった。筆者の関係する経済界、財界、文化人などに、『心学明誠舎の請けて探し』を打診し続けていたことから打開された。法人の参加者、

中尾：「石門心学」活動の現在

理事、筆者の個人的つながりなど複合的な関係から始まった経済界の人たちとの出会いに始まり、法人再建に向け、強力な支援者たちが登場した。

「地の利・人の和・天のとき」とはまさしく、こんどこそであった。心学明誠舎の再建にむけて新メンバーの集合が実現したのは2000年、まさに21世紀の幕開けの時でもあった。大阪船場の企業家ネットワークとの個人的な出会いに、私塾存続の新たな支援を受けてくれる人たちが出現した。そこからは、企業化の速さで、紆余曲折を重ねながらも2002年逐次、事務所・理事・組織の移行、それに定款の見直しが試みられている。

2003年度（平成15年度）から新体制で始動をはじめた。大阪の経済・文化にかかわる多様な人々団体で構成される財団「大阪21世紀協会」理事長を迎え、船場の地で企業を営む商社、地場産業の経営陣、これまでもその役目を担った前理事長や研究者、さらに大学や専門学校などにかかわる関係者など多彩な人材が新たに理事として参画している。また運営事務などについては、中核となる支援を始めた企業がその社屋で企業メセナを展開していくことが提供された。法人としての資料・書物の保存、整理については大阪女子大学の山中浩之氏が中心になり進め目録の作成などが始まっている。今後これらの遺蹟物は散逸を免れずに保存するため企業の私的美術館がその場所を提供することにもなる。肝腎の心学に関連した活動も従来の形式を引き継ぎながら大阪府との関係を考慮しつつ学術専門委員会・運営委員会などのプロジェクトをつくり進められることになった。文化情報センターとの共催事業や、独自事業など、生涯学習と企業の経済活動の関連性など多くの問題点を抱えてはいる。

多くの課題を抱えながら、企業の好意的な支援で、明誠舎の発祥地船場に構えられた、21世紀の心学講舎「明誠舎」が始動しはじめた。心学講舎としての現代的な社会性・公共性をどのように抱えて進むのかは今後の運営手段に委ねられるところである。

終わりに

生涯学習の提供者である、筆者の現場での経験を主軸に据え、江戸期に始まった歴史を持ち、現代に続く心学講舎明誠舎の動きを講座提供を中心に、時間的な流れに沿ってまとめた。

本稿をまとめるにあたり、筆者は明誠舎の歴史的経緯を追う作業の中で、社団法人明誠舎の事務局の立場から時代の中で心学講舎がその役目を何に求め、どのような役目を果たしたのかを検証していくことをもくろんだ。この作業に取り組むには、筆者自身が時代とともに心学明誠舎への思いが変革していくことを併行して記すことが欠かせない作業であったと考える。自己を見つめ、その思いを振り返る作業でもあったので幾分主観的な作業に流れている。しかし、『心学明誠舎』について考察していく作業の始まりは幾分にも個人的なことから始まっているのでやむをえない作業工程になる。筆者がなぜこのような私塾的な組織を抱え込んだのか、それから始まる20年間を今日まで私的領域との濃厚な関係のままでの活動であったかはひとえにこの組織や、心学講舎のあり方にも起因すると考えられる。ここで、心学講舎が設けられた時代にフィードバックしてみよう。

講舎における聴講は無償であり、「どなたでも……奥へ……女、子どもも……」と記されており、かの時代、大店（篤志家）や一部の著名な知識層（学者など）が一方的に社会的サービ

スを提供して発祥した記録をここで再考してみたい。明治期に入り、さらに昭和の再開後も、もてるものが他へサービスを与える、すなわち『お代は頂かず、どなたでも』の精神で進められたと考えられる。換言すれば、法人組織をつくった明治期でさえも提供する人とサービスを受ける人の階層が分かれており、幾分個人的な運営組織のままであったと考えられる。しかしこのような組織のあり方は欧米に見られるミッション方式も同じだと考える。ただあまりにも個人的な引継ぎで伝承された組織が心学講舎と考えられる。再会、始動し始めた心学明誠舎に比して、京都市内にあった柴田鳩翁の流れを汲む心学明倫舎は、その歴史的重さ、残された遺蹟ははるかに多い。しかし、今日何処が受け継ぐか混迷の中にいると聞いている。これも組織だった形式での運営がされなかった心学講舎の現状とも考えられる。

筆者はこんな中で、先代の主宰者であり理事長で、心学研究者であった父親竹中靖一の病臥という偶発的な出来事で始まり、彼の身边をすべて引き継ぐことに付加してこの法人を引き継ぐことになったのである。確かに家内工業的なシステムである法人であった。筆者自身も「門前の小僧」で心学に触れ心学明誠舎のおぼろげな組織の中に育ってきた。しかし第3者であることと、法人の事務局としてまた実質上の主宰者として主体的にかかわることとの相違を時間の経過が、認知させてくれる事になった。先代からの所産として、たいした考えもなく受け継ぎ、事務をこなすことでは進まない状況に出会ったが、そこでの究極の選択は法人の解散という結論でもあった。しかしいくつかの出会いの中で、心学は歴史の所産とだけ見ていたことから、心学の活動や精神が現代に通じていることに気づかされたのであった。これを論理的に語るにはまだまだ筆者の力量は貧弱である。しかし活動の中で行政の社会教育や生涯学習の政策をつぶさに学んだことが、皮肉にも心学・心学講舎の現代における役割を問いかけることを筆者に与え、教えたのであった。これはまさしく心学と心学の活動を通して、筆者自身の生涯学習の実践であり、筆者自身が生涯学習について問題を提起するエンパワーメントを生んだのである。社会教育の現場で、学習が「諸刃の刃」を生むといわれ久しい。筆者自身も自らがこの刃を研ぎ、担ぎながら歩くことになったのである。

本稿を社団法人の組織運営の視点から自己点検することからはじめた。いささか私的領域に踏み込みすぎてしまったきらいもある。可能な限りで社団法人としての心学講舎『心学明誠舎』の時間的経緯に沿った変遷を検証した。多くの問題を抱える生涯学習振興政策の中で、行政と連携をつなぎながら民間団体としての使命や社会的責任をどうはたすのか。企業との連携で、心学・心学講舎の伝統を守り発展させていけるのか、また企業は支援をできるのかなど課題は大きい。

本稿では考察しなかったが、大学や研究機関がネットワークを進めている大阪府の文情フェスタから少し距離を置きながら、民間団体でもある他の研究機関（懐徳堂・適塾・泊園記念会など大阪伝統ある塾）との密接な連携を取ることから、それらが持つ地域固有の文化的、歴史的な所産を活かすことができないだろうか。大阪に残る伝統的な民間活力と、新たなネットワークを有効につないでいけないかと関係者間で考察している途上である。本稿において、筆者が現場からみた社会教育行政や生涯学習政策の問題点を論じることはしない。次の機会に、大阪府の生涯教育政策や、高等教育機関（大学など）が行政と連携して取り組む生涯学習提供の方

中尾：「石門心学」活動の現在

法や問題点を検証し、考察を進めたいと考える。

〈注〉参考文献

- ① 古田 紹欽・今井 淳編『石田梅岩の思想——「心」と「儉約」の哲学』ペリカン社 p. 253 ～石田梅岩略年譜・心学研究文献
- ② 時岡禎一郎編著『おおさか発文化・生涯学習情報 大阪府立文化情報センターの20年』学文社
- ③ 大阪春秋 第72号『今に生きる「安心の哲学」おおさかの心学』大阪春秋社
- ④ 社心学参前舎編『心学が拓く21世紀の日本』(社心学参前舎)
- ⑤ 丹の街 TOWN MAGAZINE No. 47 (丹波の情報発信マガジン47)
- ⑥ 石川 謙述『心学を語る』(日本放送協会——人生読本) 昭和35・3・28～4・3 放送
- ⑦ 社心学明誠舎編『明誠舎沿革略』(第200回例会記念) (社心学明誠舎)
- ⑧ 大阪府生涯学習情報誌『アクティブ・オオサカ 道・楽・人』第8号(1997年 春号)

☆付表 事業記録（開催講座の演題・講師など）

1986年度（昭和61年度：好文倶楽部）

1986年10月9日	「心学と論語」	加地 伸行氏（大阪大学文学部教授）
12月12日	「心学の歩み」	山中 浩之氏（大谷女子大学専任講師）
2月13日	「心学と大阪商人」	宮本 又朗氏（大阪大学経済学部教授）

1987年度（昭和62年度：新阪急ビル12F・スカイルーム）

1987年4月10日	「心学と儒教」	加地 伸行氏（大阪大学文学部教授 中国哲学専攻）
6月12日	「心学と仏教」	荒牧 典俊氏（大阪大学文学部教授 インド哲学仏教学専攻）
8月14日	「心学と江戸時代」	山中 浩之氏（大谷女子大学専任講師 日本思想史専攻）
10月9日	「仏教と老荘思想」	中島 隆蔵氏（東北大学文学部教授 中国思想史専攻）
11月13日	「陽明学」	山下 竜二氏（名古屋大学文学部教授 中国思想史専攻）
2月12日	「心学と江戸思想」	子安 宣邦氏（大阪大学文学部教授 日本思想史専攻）

1988年度（昭和63年度：新阪急ビル12Fスカイルーム）

1988年4月8日	「難波とシルクロード」	井上 薫氏（大阪大学名誉教授・堺市立 博物館館長：日本古代史専攻）
6月10日	「心学と天理教」	加地 伸行氏（大阪大学文学部教授 中国哲学専攻）
8月12日	「心学を読む」	山中 浩之氏（大谷大学助教授 日本思想史専攻）
12月23日	「徳川思想と心学」	山中 浩之氏（大谷大学助教授 日本思想史専攻）
1989年2月25日	「心学と大阪」	小堀 一正氏（追手門学院大学講師 日本思想史）

1989年度（平成元年：大阪郵政会館&新阪急ビルスカイルーム）

1989年4月28日	「中沢道二と心学普及」	竹下喜久男氏（仏教大学文学部教授 日本教育文化史）
5月19日	「心学における江戸と上方」	石川松太郎氏（日本女子大学教授 （社）石門心学会理事長日本教育史）

中尾：「石門心学」活動の現在

1989年 7月21日	「大阪の心学と福祉活動」	木村 壽氏（大阪教育大学助教授 日本仏教史）
9月22日	「近世大阪商家の風習」	近江 晴子氏（天満宮史編纂委員 大阪商人研究家）
11月24日	「商家の家法と心学——丹波屋七兵衛を中心に——」	山中 浩之氏（大谷女子大学助教授 日本近世教育史）
1990年 1月19日	「『梅颯日記』にみる頼山陽と母静子」	西岡まさ子氏（女性史研究家）
3月16日	「懐徳堂と心学」	小堀 一正氏（追手門学院大学講師 近世思想史）

1990年度（平成2年度：大阪郵政会館・新阪急スカイルーム）

1990年 5月18日	「堺の心学と郷学所」	福島 雅蔵氏（花園大学教授：日本近世史）
7月20日	「農村文化と心学」	山中 浩之氏（大谷女子大学助教授 ：日本近世教育史）
9月18日	「近世の出版文化と心学」	今田 洋三氏（近畿大学教授 ：日本近世文化史）
11月17日	「近世上方の芸能と風俗」	田中 豊氏（大阪市史編纂所所員）
1991年 1月18日	「俳諧と心学」	藤田 真一氏（京都府立大学助教授 ：国文学）
2月22日	「心学の女性像」	小堀 一正氏（追手門学院大学講師 近世思想史）

1991年（平成3年：大阪郵政会館・新阪急スカイルーム）

1991年 5月17日	「仁徳天皇とその周辺」	奥田 尚氏（追手門学院大学助教授）
7月19日	「近世の医療と心学」	山中 浩之氏（大谷女子大学助教授）
9月20日	「祖徠学と心学」	藤本 雅彦氏（帝国女子大学助教授）
11月15日	「江戸時代の大坂と銅」	今井 典子氏（住友資料館研究員）
1992年 1月17日	「手本紙の話——寺子屋のお手本——」	肥田 皓三氏
3月27日	「蘭学・洋学の展開と心学」	小堀 一正氏（追手門学院大学講師）
「近世町人塾心学明誠舎を再現する」（文情センター早春セミナー&展示）		
1992年 3月2日	① 心学の発展と明誠舎 ② 心学と中国思想	山中 浩之氏 加地 伸行氏
3月2日～31日	「心学樂舎の教科書」展	展示

1992年（平成4年：大阪府立文化情報センター）

1992年 5月22日	「江戸期住友の経営理念」	作道洋太郎氏（近畿大学教授日本経済史）
7月17日	「町人学者木村兼葭堂のことども」	水田 紀久氏（金蘭短期大学教授 ：近世学芸史）
1992年 9月18日	「東海道四谷怪談の世界」	永吉 雅夫氏（追手門学院大学教授 近世文学）
11月13日	「天理図書館所蔵の心学関係の文献について」	金子 昭氏（天理大学講師）
1993年 2月17～19日「浪速のにぎわい 遊楽と信仰と」 大阪府立文化情報センター共催事業		
① 2月17日	「幕末大坂市内観光」	北川 央氏（大阪城天守閣学芸員）
② 2月18日	「開帳と砂持と」	田中 豊氏（大阪州市史編纂所）
③ 2月19日	「住吉さんと天王寺さん」	野掘 正雄氏（相愛大学講師）

1993年度（平成5年：大阪府立文化情報センター）

連続講座「旅と参詣」〈江戸期における“旅の発見”〉		
1993年 5月21日	「大坂と巡礼」	田中 智彦氏（大坂女子短期大学助教授）
7月16日	「大坂と金毘羅参詣」	北川 央氏（大阪城天守閣学芸員）
9月17日	「伊勢信仰とおかげまいり」	相蘇 一弘（大阪州市立博物館学芸課長）
12月17日	「大名の旅あれこれ」	竹下喜久男氏（仏教大学教授）
1994年 2月16～18日「近世における医と病いと心」 — 江戸期庶民の病への対応とその心 — 大阪府立文化情報センター共催事業		
① 2月16日	「痘瘡への挑戦」 — 病魔をこえた ヒューマニズム —	浅井 允晶氏（堺女子短期大学教授）
② 2月17日	「はしかにみる民衆の病観」	藤井 裕之（吹田市立博物館学芸員）
③ 2月18日	「華岡青洲と麻酔手術」	高橋 克伸氏（和歌山市立博物館学芸員）
1993年10月20日～11月20日「江戸期町人の商いと学び — 明誠舎と丹波屋と —」 大谷女子大学秋期特別展&講座（大谷女子大学資料館）		
11月6日	① 「近世町人の 商いと学び」	作道洋太郎氏（大阪大学名誉教授・ 大坂国際大学教授）
	② 「明誠舎と丹波屋と」	山中 浩之氏（大谷女子大学助教授）

1994年度（平成6年：大阪府立文化情報センター）

連続講座「近世大坂地域の『家』と生活」		
1994年 5月6日	「近世大坂の『家』と心学」	乾 宏巳氏（大坂教育大学教授）
7月8日	「家の生活空間・生活様式」	吉村 堯氏（大阪芸術大学教授）

中尾：「石門心学」活動の現在

1994年9月9日	「近世大阪の借家人の生活」	牧 英正氏（大阪市立大学名誉教授・奈良産業大学教授）
11月11日	「近世大阪地域の家族・女性と婚姻」	宮下美智子氏（大阪教育大学教授）
1995年2月15日～2月17日「浪花メディアの事始」 大阪府立文化情報センター共催事業		
① 2月15日	「浪花の出版文化」 — ベストセラーを 生み出した人々 —	坂本 宗子氏（出版史研究家）
② 2月16日	「幕末・明治の引き札」 — 広告の歴史 —	中谷 哲二氏（天理参考館）
③ 2月17日	「幕末・明治の大阪の 新聞と雑誌」	北崎 豊二氏（大阪経済大学教授）

1995年度（平成7年度：大阪府立文化情報センター）

1995年「近世町人社会の思想と学芸」		
6月2日	「中江藤樹と孝子伝」	子安 宣邦氏（大阪大学教授）
7月21日	「『節用』の日本文明」	横山 俊夫（京都大学助教授）
9月22日	「大阪の町人学者富永仲基」	宮川 康子氏（千葉大学助教授）
11月17日	「石田梅岩における『家』」	衣笠 安喜氏（立命館大学教授）
1996年2月14～16日「『おかげ』— 近世民衆の恩の思想 —」 大阪府立文化情報センター共催事業		
① 2月14日	「天地のおかげ — 儒者貝原益軒の場合 —」	辻本 雅史氏（京都大学助教授）
② 2月15日	「おかげはわが心にあり — 民衆宗教と石門心学 —」	桂島 宣弘氏（立命館大学助教授）
③ 2月6日	「先祖のおかげ」	大桑 齊氏（大谷大学教授）

1996年度（平成8年度）

1996年4月22日	「大阪周辺の心学」	山中 浩之氏（大谷女子大学教授）
〈明誠舎現代心学ゼミナール〉 『近世をささえた女たち』— 近世に女性のしなやかさの秘密を探る — 1996年7月8、22、29日：大阪府立文化情報センター共催事業		
① 7月8日	「女の近世・男の近世」	藪田 貫氏（関西大学教授）
② 7月22日	「近世農村における『家』と女性」	宮下美智子氏（大阪教育大学教授）
③ 7月29日	「江戸時代の家政と家庭責任」	桑原 恵氏（四国女子大学助教授）
1997年2月21日	「心学のまなび」	辻本 雅史氏（京都大学助教授）

〈明誠舎早春セミナー〉 『まなび』近世に学びの原点を探る — 1997年3月5、6、7日：大阪府立文化情報センター共催事業		
① 3月5日	「武士のまなび — 儒学的教養と武士 —」	宇野田尚哉氏（学術振興会特別研究員）
② 3月6日	「村落民衆のまなび」	布川 清司氏（神戸大学教授）
③ 3月7日	「村落知識人のまなび」	横田 冬彦氏（神戸大学助教授）

大阪府生涯学習情報誌「アクティブオオサカ道・楽・人」(第8号)
 グループ活動として「明誠舎現代心学セミナー」が紹介・掲載される

1997年度（平成9年度）

〈明誠舎現代心学ゼミナール〉 — 近世人は『自国』（日本）をどう見たか — 1997年7月7、14、28日：大阪府立文化情報センター共催事業		
① 7月7日	「近世儒者の『自国』像」	中村 春作氏（広島大学助教授）
② 7月14日	「神道の『自国』像」	樋口 浩造氏（愛知県立大学専任講師）
③ 7月28日	「国学的『自己』像の生成」	桂島 宣弘氏（立命館大学助教授）
〈明誠舎早春セミナー〉 — 日本における近代『国民国家』の成立 — 1998年3月4、5、6日：大阪府立文化情報センター共催事業		
① 3月4日	「近代知識人の成立」	中村 春作氏（広島大学助教授）
② 3月5日	「近代教育の成立」	辻本 雅史氏（京都大学教授）
③ 3月6日	「近代国語の成立」	長志 珠絵氏（立命館大学非常勤講師）

1998年度（平成10年度）

〈明誠舎現代心学ゼミナール〉 — 近世の読書『江戸時代に本はどう読まれたか』 — 1998年7月3、10、17日：大阪府立文化情報センター共催事業		
① 7月3日	「『徒然草』はどうよまれたか」	山東 功氏（学術振興会特別研究員）
② 7月10日	「庶民の読書と儒学」	宇野田尚也（学術振興会特別研究員）
③ 7月17日	「国学と読書 — 近世後期の情報と読書」	桂島 宣弘氏（立命館大学教授）
〈明誠舎早春セミナー〉 — 再び近代を問う『文化の視点』から — 1999年2月12、19、26日：大阪府立文化情報センター共催事業		
① 2月12日	「史跡の成立 — 考証家の近代」	表 智之氏（学術振興会特別研究員）
② 2月19日	「性と産の近代」	金沢日出美（学術振興会特別研究員）
③ 2月26日	「漫画の近代」	吉村 和真氏（学術振興会特別研究員）

「阪神奈大學生涯学習ネット」『公開講座フェスタ』が始まる

中尾：「石門心学」活動の現在

1999年度（平成11年度）

〈明誠舎現代心学ゼミナール〉—— 危機の時代認識と対応 —— 1999年7月16、23、30日：大阪府立文化情報センター共催事業		
① 7月16日	「幕藩体制の危機と町人思想 中井履軒のユートピア」	宮川 康子氏（元千葉大学助教授）
② 7月23日	「17世紀前期中華文明の危機と日朝儒学への波紋」	樋口 浩造氏（愛知県立大学助教授）
③ 7月30日	「幕末維新の変動期における —— 朱子学者」	石黒 衛氏（学術振興会特別研究員）
〈明誠舎早春セミナー〉—— 世紀転換期を考える —— 2000年2月25、3月3、10日：大阪府立文化情報センター共催事業		
① 2月25日	「18世紀から19世紀へ鎖国観の登場」	岸本 覚氏（花園大学文学部講師）
② 3月3日	「19世紀から20世紀へ古代史学の転回と変容」	田中 聡氏（立命館大学文学部講師）
③ 3月10日	「19世紀から20世紀へ中華帝国から帝国日本へ」	駒込 武氏（京都大学大学院教授）

「阪神奈大學生涯学習ネット公開講座フェスタ'99『水辺—— 文明のゆりかご』」11月20日
「昏迷期を生きる思想 —— 石田梅岩と心学」 辻本 雅史氏（京都大学大学院教授）

2000年度（平成12年度）

〈明誠舎現代心学ゼミナール〉—— 日本人をつくった教育 —— 「江戸時代からの視点」 —— 2000年7月7、21日：大阪府立文化情報センター共催事業		
① 7月7日		沖田 行司氏（同志社大学文学部教授）
② 7月21日		沖田 行司氏（同志社大学文学部教授）
〈明誠舎早春セミナー〉—— 癒しと信仰 —— 近世・近代の宗教者の軌跡から 2001年2月23、3月2、9日：大阪府立文化情報センター共催事業		
① 2月23日	「近代の救済 —— 浄土真宗〈精神主義〉の場合 ——」	福島 榮寿氏（光華女子大学研究員）
② 3月2日	「民衆思想としての石門心学と民衆宗教」	神田 秀雄氏（天理大学教授）
③ 3月9日	「墓地をめぐる実践と言説～近世・近代の連続と断絶から」	土居 浩氏（国際日本文化研究センター講師）

「阪神奈大學生涯学習ネット公開講座フェスタ'2000『時 —— 空間を越えて』」11月20日
「循環する時代 —— 徳川時代の歴史認識 ——」 桂島 宣弘氏（立命館大学教授）

2001年度（平成13年度）

〈明誠舎現代心学ゼミナール〉——今に生きる「安心の哲学」大坂の心学の軌跡を探る—— 2001年7月6、13、27日：大阪府立文化情報センター共催事業		
「石門心学の成立事情と教義について考える」		
① 7月6日	I 近世大坂の経済危機と 新しい学問の興隆	作道洋太郎氏（大阪大学名誉教授）
② 7月13日	II 石田梅岩の町人哲学	
③ 7月27日	「現代に生きる心学の教え」 石田梅岩のふるさと亀岡市 の実例から	黒川 孝宏氏（亀岡市文化資料館館長）
〈明誠舎早春セミナー〉——おとなが学ぶこと『同時代を生きる』学ぶことの意味を探る—— 2001年2月22、3月1、8日：大阪府立文化情報センター共催事業		
① 2月22日	「生きること・学ぶこと・ 楽しむこと」 …エットーレ・ジェルピを たたえて… (第1回生涯学習賞受賞)	前平 泰志氏（京都大学大学院教授）
② 3月1日	「おとなになること・おと なであること」	前平 泰志氏（京都大学大学院教授）
③ 3月8日	「おとなが学ぶこと・おと なが教えること」 …イギリス成人教育史から…	渡邊 洋子氏（京都大学大学院助教授）

「生涯学習ネット公開講座フェスタ'2001『21世紀——人・都市・文化を語る』」11月12日
「～21世紀のまなびのシステム～生涯学習社会に向けて」

辻本 雅史氏（京都大学大学院教授）

2002年度（平成14年度）

〈明誠舎現代心学ゼミナール〉——生涯学習を生きる—— 2002年7月5、12、26日：大阪府立文化情報センター共催事業		
① 7月5日	「私にとって学ぶことの意味とは」	巽 正文氏（京都大学大学院・ 元公立中学校長）
② 7月12日	「自らの学びを生きる道中 から……」	中尾 敦子氏（社団法人明誠舎事務局長）
③ 7月26日	「石門心学における『生涯 学習』」	高野 秀晴氏（京都大学大学院）

中尾：「石門心学」活動の現在

〈明誠舎早春セミナー〉 — 出版・メディアを考察する…… in the “EDOPERIOD” — 2003年2月21、28、3月7日：大阪府立文化情報センター共催事業			
①	2月21日	「17世紀の出版革命」	宇野田尚哉氏（神戸大学国際文化部助教授）
②	2月28日	「元禄期河内在郷町の読書文化」	
③	3月17日	「『徒然草』の流行と石門心学」	

「阪神奈大學生涯学習ネット公開講座フェスタ'2002」

『阪神奈・日本・世界 — 時が動く、人が動く人、歴史が動く —』11月11日

「時代変革の思想 — 後期水戸学の尊王攘夷論」辻本 雅史氏（京都大学大学院教授）

2003年度（平成15年度）

〈明誠舎現代心学ゼミナール〉2003年7月5、12、26日 — 延期中 — 大阪府立文化情報センター共催事業			
〈明誠舎早春セミナー〉 — 荻生徂徠『政談』を読む — 2004年2月21、28、3月7日：大阪府立文化情報センター共催事業			
			中村 春作氏（広島大学大学院教授）

「阪神奈大學生涯学習ネット 公開講座フェスタ'2003」

『学びの交差点 — ゆうとの出会いを求めて —』11月11日

「メディアの歴史から見た — 学びの交差点」辻本 雅史氏（京都大学大学院教授）